

2025/9/27 (土) 公演

びわ湖・アーティスツ・みんぐる

音楽とアートでつづるおうみの民話 vol.2 「大蟹伝説と祈り」

大蟹とお坊さん

カノチヒロ (劇団ここから屋) 再話

(滋賀県甲賀市土山に伝わる民話「大蟹と僧都」より)

今から話すのは、土山町に伝わるある昔話。鈴鹿の山に、それはもう大きな蟹が住み着いて、人々を苦しめていた、ちゅう話や。

「大蟹とお坊さん」

むかし、昔。今から千年以上も前のこと。土山には、京の都から三重の伊勢神宮へ向かうための道が通ってて、険しい鈴鹿峠を越える前に人々が休憩する場所として、土山はそれはそれは賑わっていたんや。土山の人たちは、やってくる旅人相手に商売をしながら、毎日平和に暮らしていたそうや。

そんな中、いつからか、鈴鹿峠へ向かうとある坂の傍に、それはそれは巨大な蟹が住みつき始めたんや。

その蟹の大きいこと、恐ろしいこと。大きさは亀よりも犬よりも、なんと、牛よりももつとずっと大きくて、身の丈メートルはあるうかというほどや。

大きな二つの鋏が赤黒う光って、八本の足はまるで丸太のようやった。しかも、口からは霧を吐くし、激しい風やって起こす。

巨大な蟹は、坂を通りかかる旅人や、傍の集落に住む村人を次々と襲い、襲っては喰い殺した。

村人はもう恐ろしゅうて恐ろしゅうて。やからといって村人たちにはどうしようもでひきんかった。村人たちはただ、嘆き悲しむしかなかったんや。

「わしらは一体どうしたらええんや……」

「このままやと、村は滅んでしまうぞ」

「うちの村だけやない。ここら一体が全滅や」

「ああ、どうしたら良いんや」

やがて一人、また一人と村から逃げ去り、旅人も来なくなり、あんなにようけ人の通ってた道は誰も通らんくなってしもた。

そんなことがなんと百年も続いたんや。

ところで、そのころ、京の都に恵心僧都という、それはそれは大層立派なお坊さんが
いはった。そのお坊さんは本名を源信つちゆうんやけど、あまりにも立派な人やから、
人々からは尊敬を込めて恵心僧都と呼ばれてはったんや。

ある日、お坊さんの夢に観音様が現れた。観音様はお坊さんにこうお告げをしたんや。
「源信よ。鈴鹿の山で大蟹が暴れて、人々を苦しめています。行って退治をなさい。
土山の人々を、救うのです」

お坊さんはさっそく土山に行き、村人たちにこう言った。

「私が来たからにはもう大丈夫や。さあ、蟹のところへ案内してください」

村人たちは喜んだのなんの。

「都からえらい坊さんが来てくれはった」

「これでもう安心や」

「あの大蟹も、これまでやな」

村人たちは口々に言っつて、胸を撫で下ろした。

さてお坊さんが坂のところへ来ると、巨大な蟹が表れた。

「やい、坊主。お前俺に喰われに来たんか」

「大蟹よ。なんで、村人や旅人を襲うんや」

「なんでやって。そんなん、生きていくために決まってるやろう。わしを倒しに来たん
やろうけど、無駄や無駄や」

「倒しに来たんとちゃう。論しに来たんや」

「何が違うんや」

「お前が、自分の行ないを顧みられるように、このお経を唱えてやろう」

そう言っつてお坊さんは静かにお経を唱え始めた。

お坊さんはお経を唱え、そして、仏の教えを説いた。良い行ないをすることの大切さ
を、良い行ないをすれば極楽へ行けることを説いてやった。

蟹ははじめ鉄を振りかぶって、ギラギラと怒った目でお坊さんを睨み付けていた。蟹
は、すぐにでもお坊さんを食べたろう思っつたけど、お坊さんがお経を読み出すと、身
体が固まったみたいに動けへんくなった。

蟹はやがて、お坊さんの話を聞くうちにゆっくりと振りかぶつてた鉄を下ろした。ほ
んで、目からポロポロ涙を流し始めたんや。

「わしは……わしは、なんと阿呆なことをしてたんや……ああ、わしは……わしは自分
が恥ずかしい！」

大蟹が叫んだ、その時や！

なんと、蟹の甲羅が八つに割れて、大蟹はそのまま死んでしもたんや。

そんだけ悔いたっつてことなんやろな。

こうして、百年もの間人々を苦しめてた大蟹は、無事に退治された。それを聞いた村

人たちはもう大喜びで、村に戻って来た。

「良かった、ほんまに良かった」

「これで安心して坂を通ることが出来る！」

「旅の人たちもこれで一安心や！」

「お坊様、ほんまにありがとうございます！」

お坊さんは、八つに割れた蟹の甲羅を集めてこう言った。

「蟹を供養するためにお墓を建てましょう」

村の人たちは驚いた。

「わしらを困らせた悪い奴やのに？」

「そうや。あの蟹は、最後はちゃんと改心しよった。悔い改めた者に罪は無い。やから、墓を建ててちゃんと供養するんや」

村人とお坊さんは、割れた甲羅を丁寧に埋めて、その上にお墓を建てた。

お坊さんが供養のためにお経を唱えていると、お墓からぼろぼろっ、とんや小さな塊が零れ落ちた。それは、平べったい、蟹の甲羅みたいな飴ちゃんやった。お坊さんはその飴を竹の皮に包んで村人に手渡した。

「この飴には厄除けの力がある。これからは、蟹の甲羅を模した飴を作って、厄除けとしないさい」

村の人たちはお坊さんの言葉通り飴を作って、村を通る旅人に厄除けとして売るようになった。その飴は「蟹が坂飴」言うて、今でも土山の名物として広く愛されてるんや。

この伝説にはいろんな言い伝えがあつて、土山に現れた大きな蟹は、山賊のことやつたとも言われています。村人とお坊さんが作ったお墓「蟹塚」は、今も尚、土山の人たちの手で大切に大切に祀られています。

幕

《参考文献》

『甲賀のむかしばなし』甲賀地域研究会編、甲賀地域研究会発行

『つちやまのむかしばなし』土山町教育委員会発行

『宿場町つちやま』高橋慶一著、サンライズ出版（淡海文化を育てる会）

『近江の昔ものがたり』瀬川欣一著、サンライズ出版（淡海文化を育てる会）

『近江学』第九号、成安造形大学附属近江学研究所、二〇一七年一月。

他